

『ヘスター』における女性家父長とファミリービジネス  
A Female Patriarch and Her Family Business  
in Margaret Oliphant's *Hester*

近藤 真理子

KONDO Mariko

要旨

この小論では、マーガレット・オリファントの『ヘスター』(1883)を取り上げ、二人のヒロインを比較分析することにより、ヴィクトリア社会における女性とビジネスの関係を考察する。65歳の銀行家キャサリンは代々継承されてきた家父長制的価値観を体現する女性である。それに対し、若いヘスターはその価値観に閉塞感を感じている。名家の当主というプライドと責任感のために、キャサリンは女性でありながら家父長の役割を担わなければならない。その一方で、彼女は後継者エドワードに対しては母親としての愛情を感じている。しかし、家父長制システムにおいては、家父長と母親の両立は不可能である。物語の終盤、キャサリンはエドワードに手ひどく裏切られ、彼女の死後、ヘスターには結婚以外の未来は提示されない。キャサリンの悲劇的結末とヘスターの不透明な未来は、ヴィクトリア社会においてキャリアと独立を求める女性たちが闘わなければならなかった社会的、経済的、心理的障壁の高さを明確に語っている。

This paper discusses how Margaret Oliphant dramatizes the relation between women and business in Victorian society, analyzing two heroines of *Hester* (1883). While 65-year-old Catherine, a successful businesswoman, represents the patriarchal values passed down from the Vernon forefathers, young Hester feels oppressed by the values. The pride and responsibility as a head of a distinguished family impose a contradictory role as a female patriarch on Catherine. She has mother-like affection for Edward, her heir, but is eventually crushed by his betrayal. After Catherine's death, Hester has no other choice but marriage. Catherine's tragic ending and Hester's uncertain future demonstrate the social, financial, and psychological obstacles with which women aspiring for careers and independence struggled in Victorian society.

キーワード： ヴィクトリア小説(Victorian Fiction)、 ファミリー・ビジネス(Family Business)  
家父長制(Patriarchy)、 女性とキャリア(Women and Careers)、 結婚(Marriage)、 家族(Family)

I

マーガレット・オリファント(Margaret Oliphant, 1828-97)が1883年に発表した『ヘスター』(*Hester: A Story of Contemporary Life*)は、登場人物の女性名をタイトルに冠するそれまでのオリファント作品と少々内容を異にする。「カーリングフォード年代記」の『マージョリバンクス嬢』(*Miss Marjoribanks*,

1866)や『フィービー嬢』(*Phoebe, Junior*, 1876)は、それぞれヒロイン、ルーシラ(Lucilla)とフィービーの少女期から始まり、彼女たちの葛藤が恋愛模様を散りばめながら語られ、紆余曲折を経て、結婚へと終結する物語である。<sup>1</sup>このような物語の流れと結末は、若い女性を主人公とする19世紀小説の定石といっても過言ではない。それゆえ、そのような物語に慣れ親しんでいた当時の読者たちが、この作品に上記のような物語を期待したとしても全く不思議ではない。ところが、物語は冒頭からそのような読者の予想を裏切ってしまう。ヒロインであるはずのヘスターの名前すらなかなか登場しないからだ。

物語の冒頭では、レッドバラ(Redborough)というイングランドの地方都市で、銀行業を営むヴァーノン家(Vernon)4世代に渡る以下のような系図が要約的に語られる。ミダス王よろしく全てを金に変えてしまうような“a special gift”(5)を持った初代ジョン・ヴァーノン(John Vernon)に始まり、その息子エドワード(Edward)を経て、エドワードの夭折した次男の息子2代目ジョン・ヴァーノンへと銀行は継承されていく。ジョンは叔父の忘れ形見、従妹のキャサリン(Catherine)と結婚すると考えられていたが、祖父の死後、態度を豹変させ、別の女性と結婚するに至る。

その後、物語はジョンの浪費癖に起因するヴァーノン銀行の危機の顛末へと移っていく。取り付けによる銀行の破綻を察知した行員のルール氏(Mr. Rule)がジョンの屋敷を訪ねたときには、何も知らない夫人が一人残されているだけだった。この時、銀行を救ったのは、ジョンに結婚を反故にされた共同経営パートナーのキャサリン・ヴァーノンだった。“Miss Catherine”と題された第二章では、彼女の活躍ぶりとその後の町への貢献が存分に語られ、第三章は約30年の年月を一足飛びに飛び越え、1860年代ヴァーノン家の現在へとシフトする。

既に65歳となった独身のキャサリンは、今もなおレッドバラの名士であり、ヴァーノン家の家長として威光を放っている。ヘスターが初めて登場するのは、この状況下である。大陸へ逃亡したジョンが当地で亡くなり、寄る辺のなくなった夫人とその娘ヘスターが、キャサリンにレッドバラに招かれるのである。この時点から、本格的に物語は動き出すが、ヴァーノン家の系譜と1820年代の危機を語る冒頭は今後の物語の理解において不可欠である。男性から男性へ、しかも家族間で継承されてきたヴァーノン銀行がこの作品におけるジェンダーとビジネス、そして家族との関係を考えるとき、極めて重要な枠組みを担っているからだ。

読者のロマンティックな期待に応えるかのように、ヘスターと求婚者たちをめぐるドラマも展開されるが、物語の焦点は終始キャサリンから離れることはない。デイヴィスとネリスト(Davis & Nellist)がOxford World Classics版の序文で、“this ‘Story of Contemporary Life’ which calls itself *Hester* but is centered upon Catherine”(xxv)というのは、概ね正しい。ヘスターのプロットはキャサリンの再来、あるいは鏡像のようにキャサリンの物語に絡みついている。ジョンソン(P. E. Johnson)はこの小説のタイトルと二人の女性の関係について、次のように述べる。

As a title, then, the emphasis on *Hester* is partially correct, a way both of appealing to a Victorian reading audience more used to following the romantic career of a marriageable young woman than focusing on the business career of an old maid of 60-some years and of leading that audience, through its identification with the character Hester, to an appreciative understanding

## of Catherine Vernon (2-3)

女性であるがゆえに、キャサリンとヘスターの名は物語の冒頭で提示されたヴァーノン家の系譜に本来記されることはない。しかし、オリファントが二人をどの男性にも優る人間として描いているのは明白だ。<sup>2</sup> 本稿では、キャサリンとヘスターを比較検討することによって、ヴィクトリア朝イギリス社会における女性とビジネス、そして家族との関係について考察したい。その過程でキャサリンの悲劇的結末の本質が明らかになるだろう。

## II

さて、レッドバラの町で代々銀行業を営むヴァーノン家とは、どのような一族なのだろうか。この章では、現在の当主キャサリンと家族との関係から考えてみたい。

危機の原因を作った2代目ジョン・ヴァーノンは“(He) resembled the golden great-grandfather, and great things were hoped of him”(6)と期待されていた。彼はキャサリンについて“*How can a girl understand banking business?*”(8)と笑いとばすほど女性の能力を軽んじている。この時のジョンの笑いについて、語り手は“*one of those offensive laughs with which a coarse-minded man waves the banner of his sex over an unmarried woman*”(8)とコメントする。ここから、ヴァーノン一族は女性とビジネス、女性と結婚に対して極めて因習的であることが見て取れる。

そのジョンが結婚相手に選んだのがキャサリンと対極をなす女性であるのは当然だ。彼女は後にヘスターの母親となる女性だが、“*Mrs John Vernon was considered very refined and elegant according to the language of the day, a young lady with many accomplishments.*”(9-10)と描かれ、当時の家父長制社会が称揚した“*helpless, ignorant*”(11)な女性の典型である。物語中、終始ジョン夫人としか呼ばれないのは示唆的である。彼女はジョンの「女の子に銀行ビジネスが解るものか」という認識を体現し、家業についての知識や関心を全く持たないばかりか、“*Mrs John would have considered it a slight to the delicacy of her mind to have been supposed to know anything about the bank*”(10)と、女性がビジネスに携わることを恥であるかのように捉えている。実際、ルール氏が「取り付け騒ぎ」“*a run on the bank*”について話をしても、滑稽なまでに理解できない。

八方塞がりとなったルール氏が思い出したのが、キャサリンの存在だった。ジョンの嘲りに反して、彼女は祖父に連れられ幼い頃から銀行を訪れており、銀行業務に関心を持つばかりでなく、精通してもいた。銀行の危機を知るや、彼女は即座に母方から受け継いだ財産を投げ出す決断をし、自ら騒ぎに対応し、銀行の信頼を回復させる。一方、騒ぎの元凶ジョン・ヴァーノンは大陸に出奔してしまい、その後ヴァーノン銀行はキャサリンの手に委ねられる。

... the bank ever after remained in the hands of Miss Vernon, who, it turned out, had more than her grandfather's steady power of holding on, and was, indeed, the heir of her great-grandfather's genius for business. The bank thrived in her hands as it had done in his days, and everything it

touched prospered. (22)

キャサリンがヴァーノン銀行を救い、ジョンの跡を引き継いだ時代は、女性とビジネスの関係についてジョンのような考え方が支配的であった。しかし、語り手は“*But it was the fashion of the time to be unpractical just as it is the fashion of our time that women should understand business and be ready for any emergency.*”(10)と述べ、1820年代と今(1860年代)とは時代が異なることを強調する。女性もビジネスを理解するべき時代になったのだと。ヘンリー(N.Henry)が“*a portrait of a powerful female banker that is unprecedented in Victorian fiction*”(242)と述べているように、キャサリンは公的領域において当時のジェンダー規範を超越する先駆的な女性だと言ってよいかもしれない。<sup>3</sup>では、私的領域つまり家族は彼女にとってどのような意味を持つのだろうか。

前述したように、ジョンが他の女性と結婚して以来、キャサリンはビジネスと地域への貢献に人生を捧げ、65歳の現在まで独身で、当然子どもはいない。彼女には通常の意味でいう「家族」は存在しないのだ。しかしながら、ヴァーノン家の家長であるキャサリンにとって、「家族」は2つの観点から特別な意味を持っている。

一つ目は、ビジネスと家族が分かち難く結びついているという点である。19世紀当時のイギリスでは、ヴァーノン銀行のような地方銀行は血縁で結ばれた絆によって成り立っていることが多かった。<sup>4</sup>この小説の冒頭で語られるように、銀行経営は父から息子、あるいは、甥や孫に引き継がれ、一族全体の運命はその事業の成功次第であったのだ。前述の引用でキャサリンが“*the heir of her great-grandfather’s genius for business*”と言われていたことを思い出したい。ここでは、ビジネスの才能は個人のものではなく、血統によるものだとして認識されている。この前提に従って、ヴァーノン銀行はファミリービジネスとして、世代から世代へと受け継がれてきたのだ。実際、キャサリンは自分の後継者に初代ジョン・ヴァーノンの血を受け継ぐ2人の若者、ハリー(Harry)とエドワード(Edward)を選んでいる。ハリーは初代ジョンの娘の血を引く人物で、エドワードは同じくジョンの弟の系統である。ハリーは2代目ジョンがかつて夫人と自分のために建てたホワイト・ハウス(White House)に妹エレン(Ellen)と住み、エドワードはキャサリンと共に“*the Grange*”と呼ばれる邸宅に暮らしている。ハリーもエドワードもジョンの直系の子孫ではないが、エレンも含め、“*these three, who were the nearest to her[Catherine] in blood, were disposed to give themselves airs, and to punish intruders who presumed upon a fictitious relationship.*”(26)と、キャサリンとの血縁の近さが語られる。彼らにとっては、血縁という繋がりにはビジネスにおいて、不可欠な要素なのだ。

もう一方で、キャサリンにとっての「家族」とは、家長として面倒を見、保護すべき慈善の対象でもある。

As she got older she became almost the most important person in Redborough. The people spoke of her, as they sometimes do of a very popular man, by her Christian name.... Catherine Vernon was the first thought when anything was wanted either by the poor who needed help, or the philanthropist who wanted to give it. (23)

今や、レッドバラの有力者となったキャサリンは、最早ただの銀行経営者ではなく、慈善家としての役割も担っている。その慈善対象の最前列には、ヴァーノンの一族に連なる人々がいる。彼女は古い屋敷を買い上げ、大金を費やして6世帯が暮らせる快適な共同住宅“Vernonry”に仕立て、ヴァーノンの名前を持つマイルドウェイ・ヴァーノン(Mildway Vernon)やヴァーノン=リッジウェイズ(Vernon-Ridgeways)の姉妹たち、4人の子持ちの未亡人レジナルド・ヴァーノン夫人(Mrs Reginald Vernon)一家を住まわせている。その上、ヴァーノンとは血縁のない、キャサリンの母方の親戚にあたるキャプテン・モーガン夫妻(Captain Morgan)もヴァーノンリーに暮らしている。また、“By the time she was sixty-five she was a sort of amateur grandmother in numbers of young household”(24)や“She was Aunt Catherine to a great many people”(26)と言われるように、有力者になったキャサリンの周囲には、血縁者だけでなく、擬似血縁者が群がるように集まっている。つまり、この物語では、誰も彼もが互いに“cousin”を名乗ることが許されているように、<sup>5</sup>「家族」の概念が曖昧なのが特徴的だ。「家族」という一族の境界が膨張することで、ヴァーノンの影響力が広がっていくのである。

ヴァーノンの名のおかげでキャサリンの援助を享受しているはずの、共同住宅の住人マイルドウェイやヴァーノン=リッジウェイズ姉妹たちは、しかしながら、キャサリンに感謝するどころか、内心では嫉妬と軽蔑を持って余し、彼女のいないところで批判と揶揄を繰り返している。そして、キャサリンは自分の庇護者たちの感謝も尊敬もない本心を見透かしている。彼らのその態度が“*These might have made her close her heart against them, and turned her into misanthrope*”となり、“*Catherine ... became cynical, in spite of herself. She tolerated everything, and smiled at it.*” (60)と現在のキャサリンの性格を形成する遠因になっている。それにもかかわらず、彼女が困窮した一族の援助をやめないのは、家族に対する愛情ゆえではない。ヴァーノンの家長としての責任感が一族の庇護につながっていると同時に、彼らへの憐憫が彼女自身の優越性を再確認する糧となっているのである。

つまり、本来はプライベートな愛情で結ばれているはずの「家族」は、キャサリンにとってはビジネスや権力の誇示といった公的な意味合いを強く帯びているのである。

ヴィクトリア時代の家父長制システムは、社会を公的領域と私的領域にわけ、そのイデオロギーの下、前者を男性に、後者を女性にとジェンダーによる振り分けを行なった。しかし、当時の中産階級が称揚した女性の理想像、「家庭の天使」が君臨する暖かく清らかな家庭はこの作品には登場しない。むしろ、語り手はキャサリンをエリザベス I 世に喩え、子どもがいないことを次のように肯定的に述べる。

...when the hearts of the mothers were torn with anxiety, she[Catherine] went free. She had the good of other people's children in a wonderful degree, but it was impossible she could have the harm of them — for those whom she took to were the good children, as was natural, the elect of this world.... A woman with plenty of money, with a handsome, cheerful house, and a happy disposition, she had — at least since her youth was over — never had occasion to remember the want of those absorbing affections which bind a married woman within her own circle. (24-25)

この語り手の言葉には、子どもたちに苦勞し続けた作者オリファントの実人生の反響が少なからず感

じられる。しかし、ここで重要なのは、愛情の欠落を埋めるものが金だと指摘されていることだ。キャサリンの「家族」を支えているものは、相互の愛情ではなく、彼女の経済力や地域への影響力に他ならないのである。

ヘスターが参入するのは、このようなヴァーノン家である。次章ではキャサリンとの初対面の場面に焦点をあて、二人の関係について検討してみたい。

### III

ヘスターはジョン・ヴァーノンが大陸へ逃亡した後に生まれた娘である。ジョンの死後、キャサリンにヴァーノンリーに招かれ、14歳の時に母親とともにレッドバラにやってくる。彼女はそれまで一族のことはほとんど知らず、なぜ自分が親類縁者と離れ、異国で暮らすことを余儀なくされたか全く理解していない。母親のジョン夫人はそもそも夫の悪事を理解できていないが、レッドバラの人々も彼女の気持ちを考えて、父親の裏切りについてはずっと口を閉ざしたままである。そのため、レッドバラで暮らしながらも、物語終盤まで彼女は真相を知らずにいる。このヘスターの認識の空白は物語にドラマティック・アイロニーをもたらす。一族の系譜と銀行の危機の経緯がヘスターの登場以前の冒頭で語られる意味はここにある。物語は秘密の暴露とその結果を予感させながら進んでいく。その結果、サスペンス効果が生み出され、センセーション小説の様相を帯びて、読者の興味を繋いでいくことになるのだ。<sup>6</sup>

ヘスターは父親の良い面ばかり目にしていたため、彼が祖国を離れることになったのは誰かに陥れられたからだと誤解し、原因がキャサリンにあるとの疑いを拭いきれないでいる。また、キャサリンの方でも、自分と対照的なジョン夫人を好きになれないのと同様に、ヘスターも好きになれないと会う前から考えている。そんな先入観を持ったまま二人が初めて出会うのは、ヘスターたちがヴァーノンリーに落ち着いた夜のことである。キャサリンは彼女たちの様子を見に、前触れもなく夜遅くヴァーノンリーを訪れるが、ヘスターに拒絶されてしまう。そして、この不運な出会い以降、お互いへの敵意は揺るぎないものになる。

初対面で、互いに敵意を持ったキャサリンとヘスターではあるが、初めから似たもの同士と設定されているのは明らかだ。ヴァーノンリーの部屋の戸口を境に対峙する二人の顔が暗闇の中、蠟燭の灯りで照らされたとき、語り手は“**There was a sort of resemblance to each other in their faces and somewhat largely developed figures.**”(35)と彼女たちの類似性に言及する。<sup>7</sup>キャサリンが“I don’t know you”と言えば、ヘスターは“I am Hester; but I don’t know you either.”と簡潔に名乗り、同じ言葉を繰り返す。それに対してキャサリンも“I am Cousin Catherine.”と簡潔に返す。この極めて映像的な場面で、65歳と14歳の二人のヒロインはお互いの鏡像のように描かれている。

イングランドに来たばかりの14歳の少女が、町の名士で一族の家長である65歳の初対面の女性と堂々と渡り合うこの場面では、それぞれの心の内が語り手によって明かされる。まず、キャサリンであるが、

As for Catherine Vernon, she was more completely taken aback by this encounter than by

anything which had happened for years. Few people opposed her or met her with suspicion, much less hostility; and the aspect of this girl standing in the doorway, defending it, as it were, preventing her from entering was half comic, half exasperating. (36)

そして、不愉快な出来事にはシニカルな笑いで応じるのが常のキャサリンは、いつものように笑うのである。<sup>8</sup> このキャサリンの笑いに対するヘスターの反応は対照的である。“Hester felt a flush of hot anger, like a flame, going over her.”(36) 65歳の一族の家長は内心の怒りを笑いで表現し、14歳の多感な少女は怒りをそのまま露にする。さらにキャサリンは次のようにヘスターに忠告する。

You must not get it into your little head that you are by any means at the head of the house, or near it. Your grandfather was only the second son, and you are only a girl — if you had been a boy it might have been different; and even my great-grandfather, John Vernon, who is the head of our branch, was nothing more than a cadet of the principal family. So don't give yourself any airs on that score. All your neighbours here are better Vernons than you — (36-37)

キャサリンは“only a girl”という言葉を持ち出しているが、この考え方こそジョンがキャサリンを銀行経営から遠ざけ、破綻の危機を招く遠因になったのではなかったか。キャサリンは、女性ながらその判断力や実行力でヴァーノン銀行を破綻から救い、長年にわたって銀行を繁栄させ、一族を盛り立ててきた。無垢で無能なジョン夫人と対比して描かれることによって、彼女はキャリアを持つ女性として、ヴィクトリア社会において先駆的存在だと理解されがちである。しかしながら、意外にも、キャサリンは自身の経歴を棚上げし、伝統的な父権的ジェンダー規範を無条件にヘスターに押しつける。ジョーンズ(W. S. Jones)はこのようなキャサリンについて、次のように述べている。

As head of the Vernon family, she[Catherine] becomes its patriarch (definitely not its matriarch).The novel emphasized her masculine role and quality; she articulates and practices the patriarchal values that keep Hester imprisoned, and these include her paternalistic charity as well as her refusal to let Hester work, despite her own example. (174)

ジョーンズが指摘するように、キャサリンはキャリアを持つ女性ではあるが、家父長的価値観に抵抗し、そのシステムを転覆させようとするフェミニスト的な意識は全く持っていない。それどころか、初代ジョンから続いてきたジェンダー規範をそのまま次世代に継承しようとする女性版家父長にすぎない。曾祖父から“genius of business”を特別に受け継いだとされるため、彼女はジェンダーにかかわらず、自分自身を突然変異的な例外だと見做しているだけなのである。

この初対面を経て、彼女たちは語り手が“*They were antagonists already, as much as if they had been on terms of equality.*”(37)と言うように、物語の終末まで敵対関係でいることになる。

## IV

ヘスターは初登場から激しい感情を露にする女性として描かれている。物語全編にわたり、彼女を特徴づけているのは、この激しい「怒り」である。初対面時の“*anger*”を皮切りに、キャサリンへの次の訪問時には、“*angrier than before,*”(60) “*that burning sense of shame and resentment in the girl’s heart*”(60)や“*fury,*”(61) “*indignant*”(61)等々と、ありとあらゆる怒りを表す言葉で彼女の心情が語られる。特に、その名も“*An Indignant Spectator*”と題された第十二章では、母親がキャサリンのパーティで周囲の人々に無視されるのを目の当たりにしたヘスターの怒りを描写する言葉は、“*a quiver of indignation,*” “*indignant soul,*” “*her firmament,*” “*angry,*” “*fiery resentment,*” “*indignant pang*”など枚挙にいとまがない。(111-113)

ヘスターの怒りの矛先はキャサリンのみではない。例えば、ヴァーノンリーの住民たちが幼い彼女の将来設計を馬鹿にすると“*a kind of indignant fury*”を覚え、“*frantic*”(68-69)になり、ハリーとの結婚話を話題にする母親やモーガン夫人、そしてエドワードにも“*the unreasonable indignation,*”(106) “*anger*”(119)や“*a suffocating sense of growing rage*”(145)を感じる。既婚者になったエレンに“*Thés Dansantes*”の手伝いを頼まれ、“*it would be giving Hester the best of chances.*”と言われたとき、“*a flush of shame and indignation*” (205)を感じ、夫探しこそ女性にとっての“*chance*”だと繰り返すキャプテン・モーガンの孫娘エマに対しても“*lofty indignation*”(237)を持って対応する。

作品全編を貫くヘスターのこの「怒り」が何に対する怒りなのか理解するのは容易だ。レッドバラにきた当初から、彼女はフランス語やドイツ語を教えて経済的に独立し、キャサリンの配下から抜け出すことを望んでいる。しかし、母親やキャサリンにその希望を伝えたところで、女性が働くことは屈辱的だと考えるジョン夫人は、娘がガヴァネスのように教えるなど外聞が悪いと反対し、キャサリンは“*Women have never worked for their living in our family, and, so far as I can help it, they never shall.*”とヴァーノン一族の伝統を持ち出して退ける。ヘスターの“*You did yourself, cousin Catherine*”の言葉も、“*That was different.*” (72)と一蹴する。その結果、ヘスターは“*She had to yield, as most women have to do. She had to consent to be bound by other people’s rules, and to put her hand to nothing that was unbecoming a Vernon, a member of the reigning family.*” (73-74)と自立の望みを半ば諦めざるをえない。ヘスターの怒りの根底には、女性は結婚し夫に依存するのが当然だとするヴァーノンの価値観、そして、それに強い反発を感じながら、それに代わる生き方を見出せない自分自身がある。つまり、人生の選択の自由を女性に許さない家父長的価値観を持つ一族の一員として生きることに、ヘスターは閉塞感を抱き、怒りを募らせているのだ。

キャサリンがヘスターの希望を退けたとき、“*these two, the old woman and the young woman, made of the same metal, with the same defects and virtues, looked each other in the eyes, and almost understood each other.*” (72-73)と語り手はキャサリンとヘスターの同一性を強調する。ヘスターはキャサリンを一方で憎みながら、レッドバラで暮らしていくうちに、キャサリンのように人々を救う存在になりたいと考えるようになっていく。あるとき、それをエマの兄のローランド(Roland Ashton)に洩らす。ローランドはロンドンからやってきた株式仲買人で、ヴァーノンリーで単調な生活を送るヘスタ

一にとっては、新たな地平を拓く“an excitement, an expectation”(195)をもたらす魅力的な男性である。その彼も女性に関しては旧弊で、“You make me wish to be a hero.”と女性の役割は男性を鼓舞することだと説く。それに対し、ヘスターは眼光鋭く彼を睨み、次のように言い放つ。

‘Do you really think...that the charm of inspiring, as you call it, is what any reasonable creature would prefer to doing? To make somebody else a hero rather than be a hero yourself? Women would need to be disinterested indeed if they like that best. I don’t see it. Besides, we are not in the days of chivalry.’ (307)

彼らの会話は次のように続く。

‘Besides,’ she said ‘it was not a hero I was thinking of. If anybody, it was Catherine Vernon.’  
‘Whom you don’t like. These women, who step out of their sphere, they may do much to be respected, they may be of great use; but —’  
‘You mean that men don’t like them’ said Hester, with a smile; ‘but then women do; and, after all, we are the half of creation — or more’ (307-308)

ヘスターのキャサリンに対する想いは、憎みながらも憧れるという非常にアンビヴァレントなものだ。重要なことは、キャサリンが家父長制の側に立ち、女性である自分がキャリアを持つことは個人的な例外だと考えているのに対し、ヘスターは女性がキャリアを望むことを女性全体の問題と捉えていることである。このように、キャサリンとヘスターでは女性と社会との関わりについて、根本的に考えが異なるが、この考え方の相違に加え、二人のライバル意識をさらに強めるものがある。それは、エドワード・ヴァーノンの存在である。

前述したように、キャサリンにとって家族とは私的な繋がりではなく、ビジネスや町における地位といった公的な力を得る基盤となっている。この家族観を支えているのが、ヴァーノン家やレッドバラ、あるいは当時のイギリス社会に浸透していた家父長的価値観である。ここで注目したいのは、キャサリンがヴァーノンの面々に対して、家父長としての姿勢を貫いている一方で、エドワードにだけは例外的に女性的な感情を抱いていることだ。

初めてキャサリンとエドワードの会話が描かれるのは、キャサリンがヘスターとの初対面を愚痴る場面である。そこでは、なみいるヴァーノンから彼を銀行の後継者の一人に選んだことが次のように語られている。

What a wise choice she had made! Many young men hurried out in the evenings, made acquaintances that were not desirable, involved themselves in indifferent society. Edward seemed to wish for nothing better than this soft home atmosphere, her own company, his books and occupations.... She was better off with Edward than many a mother with her son. (41)

この語りはキャサリン自身の声と考えてよい。また、エマからエドワードとヘスターの仲を仄めかされ、それを確かめにパーティーに乗り込んだキャサリンの心中は次のようなものだ。

Catherine's eyes, in spite of herself, turned from Emma's insignificance to the fine indignant figure of the girl whom (she said to herself) she could not endure, with the most curious mixture of curiosity, and interest, and rivalry. She, Catherine Vernon, the rival of a trifling creature of nineteen! Such a sentiment sometimes embitters the feelings of a mother towards the girl of whom her son makes choice (257)

多くの人々の擬似叔母や擬似祖母であるキャサリンが、これらの描写では母親に喩えられている。前述のように、キャサリンが母親の苦勞から免れていることを語り手は寿いでいた。しかし、それに矛盾するかのように、彼女はエドワードに対しては母親であり、温かい家庭を求めていることがうかがえる。

では、エドワードにとってもキャサリンは母親なのだろうか。彼は2代目ジョン・ヴァーノンの再来で、最終的にキャサリンも銀行も裏切ることになるのだが、その反抗心はどこから芽生えてきたのだろうか。キャサリンへの彼の不満を読者が初めて目にするのは、彼がハリーのヘスターへの求婚を知った時である。

...while other men could taste the sweetness of freedom and of love, he[Edward] was attached to an old woman's apron-strings, and had to keep her company and do her pleasure, instead of taking the good of his youth like the rest. It was a sudden crisis of this bitterness which had made it impossible for him to bear the yoke which he usually carried so patiently, and which she, deceived in this instance, believed to be pleasant to him, the natural impulse of a tranquil and home-loving disposition. (129)

この後、エドワードは急速にヘスターに魅了されると同時に、投機の魅力にも取り憑かれていく。<sup>9</sup> エドワードはローランドに“Miss Vernon...takes a share in everything that is going on around her, it does not matter what. She has been so long used to be at the head of everything, that she thinks it her natural place; and, as she is old and a woman, it stands to reason —” (178-79)とキャサリンへの反感を明かし、“I should like to pull it down about their ears as Samson pulled the temple, you know, upon the persecutors.” (181)と自らをペリシテ人の迫害を受けて力を失ったサムソンに喩え、自由を得るためなら“a murder — or even a big bankruptcy”(181)も辞さないと豪語する。<sup>10</sup>

ここで重要なのは、エドワードの憎しみがキャサリンのジェンダー、すなわち“woman”であることに関係している点である。彼は独立心旺盛なヘスターに魅かれているにもかかわらず、女性を男性と対等であるとは認めていない。銀行の資金を流用し逃亡しようとしたとき、ヘスターに説明を迫られた彼はこう答えている。

that is not what a man wants in a woman; not to go and explain it all to her with pen and ink, and tables and figures to make her understand as he would have to do with a man. What he wants, dear, is very different — just to lean upon you — to know that you sympathise, and think of me, and feel for me, and believe in me, and that you will share whatever comes. (370)

ここからも判るように、エドワードもまたヴァーノンの一員らしく、極めて家父長制的な価値観の持ち主である。そして、男性が女性に望まないこととして彼がここで挙げている内容は、これまで彼がキャサリンに求められてきたことだ。

つまり、彼がキャサリンに対して、あるいは彼女が支配するヴァーノン家に対して閉塞感を感じているとするなら、それはヘスターのように家父長制価値観による抑圧ゆえではない。「女」である家父長に牛耳られ、「女のように」家庭で大人しくしていなければならないという屈辱感に由来するのではないか。先に述べたように、キャサリンはヴァーノン一族と愛情で結ばれていない。そのことをよく知っているエドワードは、彼女が母親としての愛情を自分に抱いているとは考えもしない。彼にとってキャサリンは「女のくせに」家父長として彼の男性性を飼い慣らし、彼女の居間に閉じ込めようとする支配者なのだ。女性による支配は彼にとって、ある意味では去勢に等しい。キャサリンからの逃亡が違法なビジネスでの金儲けとヘスターとの駆け落ちという形を取るのには、彼にとってそれがいわゆる男性性の回復と等価であるからだ。家業を繁栄させ、一族を盛り立てていくには、キャサリンは女性でありながら家父長に徹しなければならなかった。それゆえ、根深い家父長制価値観を持つエドワードに憎まれることになったのだ。彼の裏切りがキャサリンにとって致命的だったのは、家父長でありながら、一方では母親としての彼への愛情が彼女の拠り所だったからだ。キャサリンの悲劇の原因は、家父長制のなかで、家父長と母親という矛盾する役割を上手く演じ分けることができなかつたことにある。皮肉にも、彼女は自らが体現する家父長制価値観に裏切られ、殺されたと言っても過言ではないだろう。そして、彼女のその挫折は自立を希求する当時の女性たちが立ち向かわなければならなかった障壁の高さを示唆しているのである。

## V

キャサリンとヘスターの対立を強めたのがエドワードであれば、彼女たちに和解をもたらしたのも、また彼である。

物語の終末近く、レッドバラから出奔する計画で、エドワードはヘスターを誘う。彼らの密会はキャサリンの屋敷のすぐ外で行われ、その壁の内側ではキャサリンが二人の会話を聞いている。ヴァーノン銀行がエドワードの資金流用で破綻の危機にさらされている状況下で一緒に行けないと言うヘスターに、エドワードは“You, John’s daughter, the man that ruined the bank.”(404)とヘスターの父親の秘密を暴露する。<sup>11</sup>

エドワードが一人で立ち去った後、キャサリンとヘスターは屋敷の門を挟んで対峙する。彼女たちの初対面と対照をなす場面である。しかし、あの時のヘスターと違って、キャサリンは真実を知って傷つ

いたヘスターを屋敷に導き入れ、二人は和解するのである。長い間お互いを敵対視してきた二人は、ここでは母親と娘に喩えられている。

...in this one corner the little stedfast light upon the group, the mother (you would have said) hiding her face from the light, hiding her anguish from both earth and Heaven, the daughter with that clinging which is the best support, giving to their mutual misery the pathetic broken utterance of tears. (412)

キャサリンは前回同様、エドワードが起こした銀行の危機にも全てを投げ打って精力的に対処する。銀行救済のため屋敷を売却し、自らヴァーノンリーに移り住むことも厭わない。この世を去るまで、キャサリンは“a woman so much superior to her sex”であり、“a grand woman”(433)である。

では、ヘスターとの和解後、キャサリンの価値観にも変化が生じたのだろうか。彼女は“You are quick witted, and you will understand.... You are young, and you are a Vernon. Bend your mind to it. Think of nothing but the business in hand.” (442)と銀行救済を手伝うヘスターを一族と認め、その能力を評価する。しかし、最終章に至っても、キャサリンはヘスターの銀行業参入を認めない。

‘It is a great pity’ she said, ‘a girl like you, that instead of teaching or doing needlework, you should not go to Vernon’s, as you have a right to do, and work there.’

‘I wish I could,’ Hester said, with eager eyes.

‘They tell me you wanted to do something like what I had done....You would soon learn. A few years’ work, and you would be an excellent man of business; but it can’t be (454)

そして、ヘスターにハリーかローランドとの結婚を勧めるのである。ヘスターは何度も“I will never marry.”(454)と宣言するのであるが、しかし、残念ながら物語では彼女に結婚以外の選択肢は示されないうままである。キャサリンは自らの挫折から、女性が自分の性と矛盾することなく社会の中で活躍することの難しさを実感したのかもしれない。彼女がヘスターに“you would be an excellent man of business”と言うのは決して偶然ではない。ビジネスで成功するためには“an excellent woman of business”ではなく、“an excellent man of business”でなければならないのだ。銀行にはハリーのサポート役として一族の外から経営者が“new blood”として投入され、ファミリー・ビジネスとしてのヴァーノン銀行が変容していく未来が暗示される。かくして、ビジネスと一体となっていたキャサリンの時代の「家族」は時代とともに変わっていくだろう。物語の最後、語り手は次のようなパラグラフで作品を締め括る。

And as for Hester, all that can be said for her is that there are two men whom she may choose between, and marry either if she please — good men both, who will never wring her heart. Old Mrs Morgan desires one match, Mrs John another. What can a young woman desire more than

to have such a possibility of choice? (456)

唯一物語のこの部分で、語り手は読者に現在形で語りかけている。それによって、ヘスターの将来は過去のものではなく、これからの問題として今を生きる読者に迫ってくる。最後に置かれた疑問文については、批評家たちの解釈は様々だ。<sup>12</sup>『マージョリバンクス嬢』や『フィービー嬢』のヒロインたちは、結末でそれぞれ自分より劣る男性との結婚をキャリアとして選択し、夫を支えるという名目のもと、自らの能力を發揮できる人生を生きていく。しかし、ヘスターはキャリアのための戦略的結婚を望まない。ヘスターに何度も結婚を拒否させたことを考慮すると、この最後の疑問文は女性のキャリアに対するオリファントのアンビヴァレントな姿勢を反映していると言ってよい。キャサリンが最後まで考えを変えなかったように、社会はまだまだ強固な家父長制に支配されている。“a practical feminism”(Langland, 148)を志向するオリファントには、結婚せずに自立できる生き方を躊躇なくヘスターに示すだけの確信がまだ持てなかったのだ。自立してビジネスを成功させるヒロインの登場は、1890年に出版される『カーステーン』(Kirsteen, 1890)まで待たなければならないのである。

#### Notes

1. ただし、多くの批評家はルーシラやフィービーの結婚はいわゆるロマンティック・ラブの帰結ではないと考えている。例えば、ロビンソン(A. J. Robinson)は

Though Oliphant does end *Miss Marjoribanks* with a marriage, I will show that she uses comedy continually to disrupt the marriage plot that is at the heart of so many mid-Victorian novels, suggesting that her ending reveals more about genre constraints than it does her political stance. (160)

と述べている。また、サンダース(V. Sanders)は“*Miss Marjoribanks* and *Phoebe Junior*, two novels that are exceptionally cynical about marriage.”(33)とこの2作品を評している。

2. このことは、オリファント作品のヒロインに関して多くの批評家の意見が一致するところである。特に銀行や不動産経営、政治等の男性領域について、ルービック(M. Rubik)は“Oliphant’s heroines excel in the male domains of bank management, estate management, and politics and are often interested in a career and in intellectual challenge than in love.”(The Subversion, 52)と指摘している。

3. 19世紀英国で女性ながらに銀行家として成功したハリエット・クーツ(Harriet Coutts, 1777-1837)の名はよく知られている。実社会には、キャサリンの先例となる女性がいたと言えよう。Johnson(3-4)参照。

4. 当時のイギリスの地方銀行については、ジョンソンの次のような記述を参照した。

“The family enterprise” drew upon kinship ties for investments, workforce, and leadership. Partnerships were often formed between brothers or cousins. The Vernon bank, then, is typical of its period with partners being drawn from cousins and nephews and all members of the family dependent on the success of the business. (3)

5. 例えば、キャサリン自身厳密には“cousin”ではないのに、初対面のヘスターに自ら“Cousin

Catherine”と名乗る。また、ローランドの妹エマは全くヴァーノン一族でないにもかかわらず、“we are all cousins together, though we don’t know each other.”(239)とこじつけ、レッドバラの社交界に入り込む“chance”を掴むために、キャサリンを“Cousin Catherine”と呼び続ける。

6. しかし、オリファントはセンセーション小説には批判的だった。彼女はセンセーション小説について以下のように述べている。

Now it is no knight of romance riding down the forest glades, ready for the defence and succour of all the oppressed, for whom the dreaming maiden waits. She waits now for flesh and muscles, for strong arms that seize her, and warm breath that thrills her through, and a host of other physical attractions, which she indicates to the world with a charming frankness.... were the sketch made from the man’s point of view, its openness would at least be less repulsive. The peculiarity of it in England is, that it is oftenest made from the woman’s side — that it is women who describe these sensuous raptures — that this intense appreciation of flesh and blood, this eagerness of physical sensation, is represented as the natural sentiment of English girls, and is offered to them not only as the portrait of their own state of mind, but as their amusement and food. (Pamela K. Gilbert, 89-90.)

7. キャサリンとヘスターの類似を物語の中で何度も指摘するのは、ヘスターが一目置くキャプテン・モーガンである。彼は “She[Catherine] was the same kind of girl as you are — masterful — very sure that her own way was the right one —”(84)や“We should all tumble to pieces if the race was made up of people like Catherine Vernon and you.”(88)などとヘスターに言って、彼女を怒らせている。

8. キャサリンは自分の笑いについて、ローランドに次のように明かしている。

‘I cannot allow myself to look at it gravely,’ she said, ‘I laugh; it is the best way. They all take what they can get, but their opinions, if they were individually weighed, of Catherine Vernon, would surprise you. They don’t think much of me. I dare say I quite deserve it...I don’t know that I am a cynic, but rather than cry, I prefer to laugh. Is that cynicism?’ (172-73)

9. ムーア(B.Moor)はエドワードの求愛に対して“Hester finds it hard to tell whether Edward is love with her or consumed with his own thoughts about speculation.”とコメントし、“Edward’s emotion...do not distinguish between sexual desire and enjoyment of speculation”(131)と指摘する。また、ヘンリーはエドワードの金と愛に対する欲望の根底に “a vindictive animosity against the woman who has kept him under her control and the institution that represents her power.”があるとし、“love of money and erotic love are entwined in ways confusing to the woman who wants to remain free of both money and sex.” (242-43)と指摘している。

10. ヘスターにもエドワードは“What were you afraid of? — tell me. You did not think I was robbing the bank, or killing Catherine?” (377)と笑いながら言うが、結局、エドワードのこの言葉は結末でどちらも現実となってしまう。

11. この闇夜の誘惑の場面には明らかにセンセーション小説の影響が感じられる。

ヘスターがエドワードの誘いを拒絶すると決めたきっかけは、ジョン夫人が何気なく口にしたジャム作りに使う苺がもうすぐ安くなるという日常的な言葉だった。それを聞いた途端、“there came to Hester another revelation as sudden...that was Impossible.”とエドワードと行くことが不可能だと悟るのである。ワグナー(T.Wagner)は当時流行していた“stock-market fiction”のセンセーショナルリズムに注目し、この場面について次のように分析する。

The Paradigms of Victorian stock-market fiction are evoked for their established associations with sensationalism and filtered through a likewise partly parodic rehearsal of older narratives of high risks in highlife. Beyond mere pastiche or parody, they become reworked as part of a literary tradition of women’s writing. (160)

12. 例えば、ピーターソン(L. Peterson)は若い女性を主人公としたオリファントの教養小説を論じるなかで、『ヘスター』の結末を取り上げ、次のように結論づける。

She[Oliphant] felt neither satisfied with the traditional feminine plot of marriage and motherhood, nor comfortable with the masculine pattern of quest and self-fulfillment, and so ended in the only way possible — with a question. (81)

ハント(A.Hunt)は“If the close doesn’t satisfy our desire to see a particular new narrative established, one based on the flourishing of female potential in the world of paid work, its Lack of resolution makes for a far from conventional love-plot ending. (169)”と指摘している。

一方で、ラポポート(J.Rappoport)はこの作品発表の前年に成立した既婚女性財産法(The Married Women’s Property Act)と絡め、“Rather than being ‘unable to imagine closure without marriage,’ as Peterson suggests, Oliphant finds a different form of closure for an unmarried woman with property.”(180)と論じている。

#### Works Cited

- Henry Nancy. *Women. Literature and Finance in Victorian Britain: Cultures of Investment*. Cham: Palgrave Macmillan, 2018.
- Hunt, Aeron. *Personal Business: Character and Commerce in Victorian Literature and Culture*. Charlottesville: University of Virginia Press, 2014.
- Gilbert, Pamela K. *Disease, Desire and the Body in Victorian Women’s Popular Novels* Cambridge: Cambridge University Press, 1997.
- Johnson, Patricia E. “Unlimited Liability: Women and Capital in Margaret Oliphant’s *Hester*.” *Nineteenth-Century Gender Studies Journal*, 6.1, Spring 2010.1-14.
- Langland, Elizabeth. *Nobody’s Angels: Middle-Class Women and Domestic Ideology in Victorian Culture*. Ithaca: Cornell UP, 1995.
- Moor, Ben. “‘Of Pride and Joy No Common Rate’: From the Surplus Women Problem to Surplus *Jouissance* in Margaret Oliphant’s *Hester*.” *Journal of Victorian Culture* Vol.26, No.1 2021. 119-133.

- Oliphant, Margaret. *Miss Marjoribanks*. 1866. Reprint. London: Penguin Books, 1998.
- Phoebe Junior*. 1876. Reprint. Peterborough, Ontario: Broadview, 2002.
- Hester* 1883. Reprint. Oxford: Oxford University Press, 2003.
- Peterson, Linda. "The Female Bildungsroman: Tradition and Revision in Oliphant's Fiction."  
*Margaret Oliphant: Critical Essays on a Gentle Subversive*. Ed. D.J. Trela. Selinsgrove: Susquehanna UP, 1995. 66-89.
- Rappoport, Jill. *Imagining Women's Property in Victorian Fiction*. Oxford: Oxford University Press, 2023.
- Robinson, Amy J. "An 'Original and Unlooked-for Ending'?: Irony, the Marriage Plot and the Antifeminism Debate in Oliphant's *Miss Marjoribanks*." *Antifeminism and the Victorian Novel: Rereading Nineteenth-Century Women Writers*. Ed. Tamara S. Wagner. Amherst: Cambria Press, 2009. 159-76.
- Rubik, Margarete, *The Novels of Mrs. Oliphant: A Subversive View of Traditional Themes*. New York: Peter Lang, 1994.
- "The Subversion of Literary Cliches in Oliphant's Fiction" in *Margaret Oliphant: Critical Essays on a Gentle Subversive* Ed. D.J. Trela. Selinsgrove: Susquehanna UP, 1995. 49-65.
- Sanders Valerie. "Marriage and the antifeminist woman novelist" *Victorian Women Writers and the Question*. Ed. Nicola Diane Thompson. Cambridge: Cambridge UP, 1999, 24-41.
- Wagner, Tamara S. *Financial Speculation in Victorian Fiction: Plotting Money and the Novel Genre, 1815-1902*. Columbus: The Ohio State University Press, 2010.